

Livezey がまとめた長期予報現状報告の草案をもとに、今後の長期予報の進め方について活発な討論が行われた。彼の草案は、筆者たちの印象では、長期予報の精度向上にかなり楽観的な展望を抱いていると思われる。彼によると、数値予報を利用することにより、米国の最近10年間の1カ月予報の成績がそれ以前に比べて格段に良くなっているという。彼の草案はこの10年間における地球大気の大規模変動に対する理解の進展とともに、彼らの長期予報に対する自信を反映しているのかも知れない。

全体討論の中で今後の長期予報の研究・開発の方向性として確認されたことは、

(a) 質の高い全球規模の観測データを蓄積する。特に海面水温データについては世界共通のデータ作成が急務である。

(b) 1カ月予報の精度向上を図る。これには数値モデルによる延長予報のための様々な改良・工夫が必要である。また、予報精度の予測や予測可能性の地域差に関する研究も重要である。

(c) 季節予報のための様々な試みを行う。特にENSOの天候に与える影響は非常に大きいので、ENSO予測に向けての取り組みが要求される。このためには大気-海洋結合モデルの実現が期待される。また、全球海面水温データを用いた大気大循環モデルによる大気の大規模変動も重要である。さらに、新たな統計モデルの構築が必要である。

(d) 大気の大規模変動に関する理解を深める。特に季節内変動、ブロッキング、テレコネクションなどで表される“天候レジーム”に関する実態と力学の解明が重要である。

(e) 10~100年規模の変動に対する科学的知見を高める必要がある。

(f) 発展途上国がこうした問題に取り組むための技術移転の推進を図る。

上記(e)でも確認されたように、今後、「地球温暖化」の問題に象徴される数十年規模の気候変動と関連して、長期予報が対象とする数年程度の変動が今以上に関心をもちられることが予想される。異常天候の出現(例えば最近の日本の気温の正偏差の持続)の度に、どの程度の時間スケールの現象と関係しているのか絶えず議論の対象となるであろう。この分野での調査研究が今後日本でもさらに進展することを期待したい。そのためには長期間の観測データの解析や品質の管理といった一見地味で基礎的な調査がきわめて重要であり、日本の研究者もこの問題により積極的に取り組むべきであると感じた。

参考文献

- WMO, 1985: Proceedings of the First WMO Workshop on the Diagnosis and Prediction of Monthly and Seasonal Atmospheric Variations over the Globe (College Park, USA, 29 July to 2 August 1985). LONG-RANGE FORECAST RESEARCH SERIES NO. 6.
- WMO, 1987: Papers presented at the Second WMO Workshop on the Diagnosis and Prediction of Monthly and Seasonal Atmospheric Variations over the Globe combined with the WMO Symposium on Ocean-atmosphere Interaction Relevant to Long-range Forecasting, (Toulouse, 15-19 June 1987), LONG-RANGE FORECAST RESEARCH SERIES NO. 9.
- WMO, 1990a: Lectures presented at the First Week of the WMO Training Workshop on Diagnosis and Prediction of Monthly and Seasonal Atmospheric Variations, (Nanjing, China, 8-12 October), LONG-RANGE FORECAST RESEARCH SERIES NO. 12.
- WMO, 1990b: Extended Abstracts submitted to the Second Week of the WMO Training Workshop on Diagnosis and Prediction of Monthly and Seasonal Atmospheric Variations, (Nanjing, China, 15-19 October), LONG-RANGE FORECAST RESEARCH SERIES NO. 13.

気象学会事務局よりのお知らせ

1991年春季大会の予稿集を購入手続きの方は、残部が若干ありますのでお申し込み下さい。

お申し込みは、FAX でも受け付けます。お支払いは

原則として郵便払込通知票で予稿集受領後、ご送金下さるようお願いいたします。

1991年度（第13回）沖縄研究奨励賞推薦応募について

- ・ 沖縄研究奨励賞（以下「奨励賞」という。）は、奨励賞規定に基づき実施します。
- ・ 推薦候補者（以下「候補者」という。）の年齢は、原則として50歳以下（7月15日現在）とします。
- ・ 候補者がグループの場合は、1グループを1名とみなします。なお、グループの代表者（1人）を決めて下さい。
- ・ 候補者の国籍や出身地などは問いません。
- ・ 対象となる研究は継続中のものでも結構です。
- ・ 応募の際は、別紙「沖縄研究奨励賞推薦応募用紙」を使用して下さい。
- ・ 選考資料として、①候補者の論文や著書などの研究成果物、②研究内容の要旨、および③研究業績目録を必ず添付して下さい。なお、選考資料の返却のご要望には応じかねます。ただし、再度の応募に当たっては、著書に限り、以前に提出したもの（沖縄協会内の事務局に保管）を利用できますので、ご一報下さい。
- ・ 候補者の研究の分類（自然科学、人文科学、社会科学）を推薦者の方で示して下さい。二つ以上の分野を指示しても構いません。
- ・ 応募締切は9月30日ですが、郵送の場合は当日消印も有効とします。9月28日以降の郵送は速達をお願いいたします。
- ・ その他、推薦応募に関して疑問の点がございましたら、沖縄協会・沖縄研究奨励賞事務局（TEL 03-3580-0641～3）までお問い合わせ下さい。



中山章会員と時岡達志会員が「岡田賞」を受賞

中山 章（元新東京航空地方気象台長）会員は、航空気象技術向上並びに知識の普及に尽くした功績により、また時岡達志（気象研究所気候研究部第一研究室長）会員は、地球温暖化の科学的評価活動に国際貢献した功績により、「岡田賞」に選ばれ、贈呈式が5月24日に行われた。

「岡田賞」は、気象技術の向上に寄与または気象事業に貢献した人に対して贈られる賞で、はじめは財団法人岡田武松記念会の事業のひとつであったが、財政上の理由などで現在は日本気象協会が継承している。

（青木 孝）

お知らせ

気象研究ノート158号「酸性雨」は、品切れでご迷惑をおかけしてきました。この度、会員多数のご要望に応じて再発行しました。ご希望の方は、学会事務局まで早めにお申し込み下さい。

配布価格 通常会員：2,050円、会員外：2,950円
 なお、編集上の都合で気象研究ノート171号の発行が遅くなっていますが目下発行を急いでいます。お詫びかたがたお知らせ致します。